

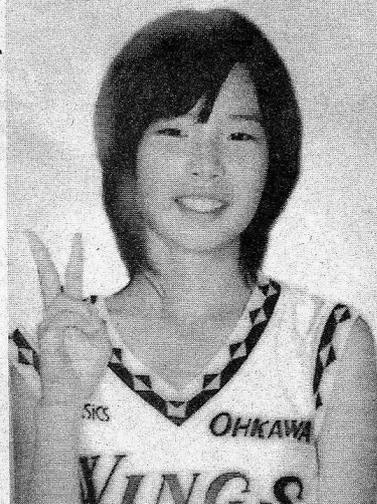
咲く花「娘が生きた証し」

連載第1部「家族の足跡」④



大川小 津波訴訟

地震発生の約50分後。石巻市の大川小学校の校庭にいた児童と教職員は、北上川にかかる橋のたもとの高台へ移動を始めた。だが、たどり着く前に津波にのまれた。

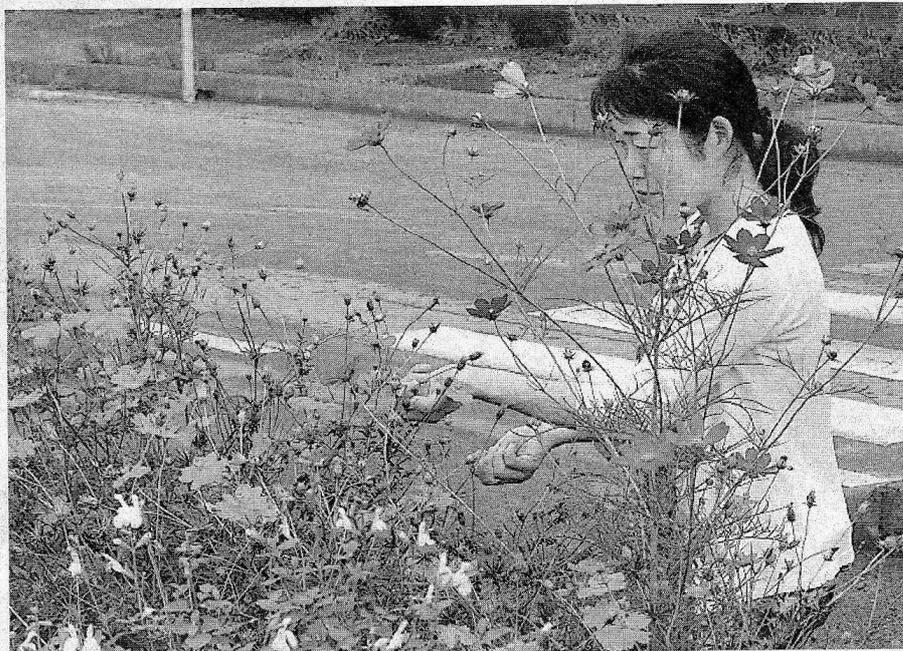


狩野愛さん

3人姉妹の末っ子で運動好き。同級生と一緒に大川小のミニバスケットチームに入り、中学校でもバスケットを続けるつもりだった。遺体の左足首には水色のミサンガが巻かれていた。あけみさんは「親にばれないように手首に巻かなかったのかも。優しくて手のかからない子だけれど、ちゃっかりした面もあった」。

その年の夏。高台の一角にある花壇に、数百本のヒマワリが咲いた。最初には苗を植えたのは、6年生の三女愛さん(当時12)を亡くした狩野あけみさん(47)。それから夏は風物詩になった。高台の花壇は震災前、愛さんや他の保護者らと一緒に世話をした場所だった。あけみさんは何かを育てた

「咲き誇るヒマワリは、娘が生きた証しなんです」
花壇は年を追うごとに彩りを増している。チューリップ、パンジー、ピオ



花壇でキバナコスモスの種を集める狩野あけみさん＝9月、石巻市

ラ、マリーゴールド。年間10種類以上の花が咲く。苗を植えた球根を抜いたり人手が必要なきときは、20〜30人の遺族らが集まる。あけみさんはあの日、大川小から車で20分ほどのパーク先に行った。車を飛ばせば救えたのでは……。自責の念から訴訟には加わらなかったが、花壇では立場に關係なく、たわいのない会話の花が咲く。

◇ 2年前、夫(48)とともに里親の認定を受けた。震災前から、親と一緒に過ごせない子どもに家庭の雰囲気味わわせてあげたいと願っていた。間もなく児童相談所から、愛さんと同じ年の女儿を紹介された。愛さんの代わりを求めているわけではない。もっと小さな子だったら、引き受けていたかもしれない。「預かった子の顔を見て思い出がよぎって涙を流したら、その子がかわいそうで」。花と語り合う日々がしばらく続きそうだ。誕生日がくれば、「愛よりもまた1年、余計に生きちゃったな」と思う。震災後をおまけの人生に思う自分を、ふと反省する。記憶の中の娘は、いつも笑顔だった。「愛を心配させるからね。泣いてばかり、いられないっちゃ」

(茂木克信)